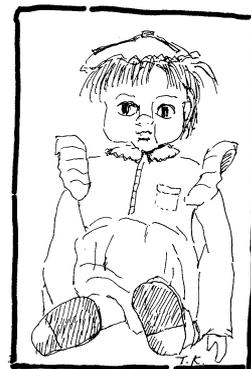


OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

| C | O | N | T | E | N | T | S |
|----------------------------------|---|---|---|---|---|---|----|
| 雑感〔森 秀麿〕 | | | | | | | 2 |
| 休日の過ごし方〔上田陽彦〕 | | | | | | | 3 |
| 病院は小さなコミュニティー-21世紀の医療環境(7)-〔牧 彰〕 | | | | | | | 4 |
| 図書館のマナーについて〔林 倫子〕 | | | | | | | 5 |
| 本を読むことに対する思い〔久保田起左〕 | | | | | | | 5 |
| 陸上と私〔田村洋輔〕 | | | | | | | 6 |
| 図書館のHome Pageを利用しよう! | | | | | | | 7 |
| 他大学図書館訪問記(11)近畿大学図書館の巻 | | | | | | | 8 |
| 書評「-DNAのパイオニア-ジェームス・ワトソン」〔吉田秀司〕 | | | | | | | 9 |
| 医学図書館員基礎研修会に参加して〔植田浩行〕 | | | | | | | 10 |
| お知らせ | | | | | | | 11 |
| 図書館業務日誌 | | | | | | | 12 |
| 編集後記 | | | | | | | 12 |



雑 感

森 秀 磨



私にとって、立花 隆という人は私の脳の中はかなり重要な位置を占めている。とっつきは彼の“脳死”である。私は思想的にはノンポリで彼のその系統の著書にはあまり興味を示していない。その著書“脳死”は、私が前任の大学で脳死判定委員としてかかわっていた時期があって、当時、脳死判定マニュアルづくりが当面の課題であった。当時、脳死臨調をはじめとして盛んにマスコミにも脳死の問題が取り上げられ、麻酔関係の学会でも常にこの問題がテーマとして取り上げられていた頃である。いろんな立場からいろんな意見が出され、反対賛成と賛否こもごもではあったが、どちらかというところでは反対意見が多かった。何事も現状を変えるときには反対する人が多いのは世の常で、現状維持に加担する方が楽であり抵抗も少ない。

さて、多くの参考書籍が発行されている中で脳死判定の技術的な側面は別として、ほとんどの著者が感情論ばかりで、脳死そのものに対しての考え方について論理的に記述したものはほとんど皆無であった。その中でひとつだけ目に付いたものがあった。それがこの書物で、かれの論点は、基本的には脳死臓器移植には賛成であるが、脳死臨調の脳死判定には疑問があって反対である。その反対理由についてハードカバー3冊にも及ぶ本と言うよりも大論文であった。今ここで議論の内容そのものについて触れるつもりはなく、私を感じ入っているのはその著述の態度である。彼があるテーマを選んで著述あるいは対談をする場合には、そのテーマについて徹底的に勉強をするようである。勿論、社会的なわれわれ医学とは無縁なテーマ、例えば政治経済などのドキュメントに近い小説などの著作には徹底した調査分析がなされていることはよくわかるのであるが、文科系の著者が理工医学の問題について徹底的に調査分析することは至難の業であると考えられるが、彼はこれを完全にこなしている。

後ほど知ることになるのであるが、彼の履歴は文学部仏文科を卒業して後に、哲学科を再び卒業している。これで彼の著書が極めて論理的であった理由が理解できた。それに、著書には文系理系の壁がない。その理由としては、彼は本来理学部志望であったが本来の希望に反して文科系に入学してしまった由である。最近サイエンス部門に関心を寄せ、東大先端研に絡んだ著書を続々出している。そこではおおいに興味のある結論を出している。現在の学生あるいは若者の具備する条件は、英語、数学、そしてテクノロジー（敢えて言うならコンピュータテクノロジー）である。そしてわが国での科学についての将来に危惧があると述べている。巷に言われていることに理系に入学してくる学生に分数式が解けない者がいるというには信じがたいことが言われているが定かではない。彼に言わせると東大にもこういった学生が入学し、やがてキャリアとして行政、特に科学行政に携わることが現実となるときのどういふことがおきるかと心配している。一見、年寄りの冷や水のような発言で、近頃の若い者はという発想とよく似ている。わが大阪医科大学の学生はこういった低級な若者は皆無であろうが、医学を学ぶベースとしての基礎的条件として英語、数学、テクノロジーを入学の条件とすることあるいは、入学してからのカリキュラムに本気で取り入れられたら大阪医大の将来もずいぶん違ったものになるであろう。

一方、私は今後も彼の著書を読み続ける予定であるが、いまだ夏に読むつもりで買った数冊の著書を読了していない。おまけに彼の執筆の速度が最近ますます速くなっている様でもあり秋の夜長の楽しみとしたい。

(もり・ひでまる 麻酔科学教授)

休日の過ごし方

上 田 陽 彦

45歳を過ぎた頃から、両肩の調子が良くない。洋服の袖に腕を通す時や、ゴルフの素振りをする時などに強い痛みを感じなくなった。肩関節は、レントゲン上特に問題なかった。自宅近くに有名な整骨院があるので通院し始めた。その甲斐あって、痛みは徐々に軽減している。しかし肩を使う運動は当分できそうにない。そんな折、昨年秋にテレビのクラシック番組で、ショスタコーヴィッチの交響曲第5番の演奏に感動し、翌日さっそく同曲のCDを買ったが、これがきっかけで完全にクラシック音楽の世界にはまってしまった。元々、クラシック音楽は嫌いではなかった。中学・高校時代の一時期、クラシックレコードを集めていた事を思い出した。あの頃は、1か月間小銭をためて買った1枚2千円のLPレコードを大切に何度か聴いていた。また、米国留学中にも、小澤征爾指揮のボストン交響楽団の演奏を何度か聴きに行った。

どうせCDを集めるのであるなら、同じ曲目の中で最も評判が良い「名盤中の名盤」にしようと考えた。各レコード会社のカタログを集めたり、クラシック音楽関係の雑誌を読むようになった。情報を集めるうちに、学生時代に何気なく買ったレコードの中に、今もって「名盤」と呼ばれているものが少なくないことを知り、我ながら感心した。

CDを集め始めた頃は、「シェエラザード」「パールギュント」「惑星」などの比較的短かい曲で構成された作品を好んで聴いた。それから、ベートーヴェンやブラームス、チャイコフスキーなどの作品も交響曲を中心に1枚ずつ吟味しながら集めていった。そして今は、マーラーの作品を大変気に入って聴いている。グスタフ・マーラー(1860年-1911年)は、世紀末的な作曲家と言われ、10曲の交響曲のいずれも、現世の苦悩と憂愁、悲痛を音楽に盛り込んだ厳しいものであるとされている。とにかく、曲全体が非常に長い。約30分にも及ぶ長い楽章もある。マーラー自身も、彼の作品があまりにも龐大であるために自分の交響曲を演奏する機会がなかなか得られなかったと言われている。しかも、他の作曲家の作品と異なり、代表的な旋律を思い出すことができない。言い換えれば特徴的な旋律が無い。

ベートーヴェンとマーラーは共に人間の運命に深く関わっていた作曲家である。ベートーヴェンは、いつの時も運命に対して堂々と正面から向き合い、それを克服しようとしているかに見える。これに対してマーラーの音楽は、異様なまでに不明瞭である。作曲者自身が運命から逃れようとして、必死にもがいている印象を受ける。マーラーの音楽の最大の理解者であった指揮者のブルーノ・ワルターは、マーラーについて、人類の苦しみに関して常に悩み、この世で生きてゆく限り、人間には悲劇的な運命が常に増し加えられてゆくという意識に常に囚われていたと述べている。マーラーのこのような考え方や曲風は、彼が育ってきた家庭環境に影響を受けている。彼はボヘミアのどかな田舎に生まれたが、厳格で短気な父親のもとで育ち、彼の兄弟達が病死したり自殺したため、早くから「死」に直面していた。牧歌的なおだやかさと、死の恐怖と不安が彼の交響曲の基礎をなしていると言われている。

休日で時間の余裕がある時に、腰を落ち着けてマーラーを聴くと、何故か何とも言えない安堵感と充足感で心が満たされる。おそらく10代、20代の若者の中で、音楽専門家を除いて、マーラーの音楽を好む者は非常に少ないと思う。一方、ある程度人生経験を積んで何度か苦しい思いもし、人生について本気で考えるような年齢に達した者にとっては、彼の音楽が強烈に入り込んでくると思う。

目まぐるしく過ぎてゆく毎日であるが、今のところクラシック音楽鑑賞が私のストレス解消法になっている。

(うえだ・はるひこ 泌尿器科学助教授)



生演奏のピアノの旋律が心地よいアメニティホール

「ポーロロンー ポローローンー ポローロンポーローンー ...。」 木漏れ日をイメージした玄関の木格子天井を潜り抜けるようにして、温もりのアメニティホールに一步足を踏み入ると、ピアノが奏でる軽やかな旋律が歓迎してくれました。ボランティアの婦人演奏者による生の音色は、喜々として板床に跳ね返り土壁にこだまし、明るい吹抜けの空間には、あたかも音の粒子による[生命の躍動]を見るようです。きっと病んだ心身にも快く響き、ともすれば沈みがちな患者の気持ちも自然と寛いで、

きっと心から癒され、この病院での療養生活が自ずと期待されようというものです。

今、患者が一番望んでいることは何でしょうか。今の医療施設に最も欠けているものは一体何でしょうか。それは[心の通う地域医療]であり、患者自身の[心の安息]です。医療は、いわば[究極のサービス業]です。医療の現場では、あくまでも[患者が主役]であり、医師や看護婦を中心とする医療従事者の役割は、主役である「患者を心身共に支援する」に尽きます。21世紀に真に期待される病院とは、患者が五感(視・触・聴・味・嗅)の全てを駆使して、病氣と闘うための[気力と体力を培う場]であるといえます。

私たち現代人は本人の好むと好まざるとに係わらず、「病院で生まれ病院で死ぬ」宿命を負わされています。病院ほど深く私たちの日常生活に係わっている建築は他にありません。従って、病院こそ最も公共的な施設なのです。病院は決して特殊な単体の建築ではなく、誰にでも分かりやすいごく普通の複合的建築でなければなりません。病院は「揺籠から墓場まで」の言葉通り[人生の縮図]です。また、病院は弱者(患者)と健常者(医療従事者)が共存する小さなコミュニティ(共同体)であり、いわば[社会の縮図]です。病院は人の喜怒哀楽の全てを直に体験する場であり、そこでは[生と死のドラマ]が毎日繰り返されています。それ故に、理想の病院とは、「誰もが生活しやすい真にノーマライゼーションの理念に基づいたコミュニティである」といえます。

超高齢化社会に備えて、[ノーマライゼーションの推進]が当面の課題ですが、この件に関しては、長年の検討を経て未だに適切な指針がありません。「健常者は弱者の予備軍である」「元気な人もいずれは歳をとる」という観点で捉えて、両者が共存できる「バリアフリーの社会」が切に望まれます。要は、ディテール(形)ではなく、ポリシー(理念)の問題であり、ハード(施設)よりもソフト(社会)が一層大切です。

赤穂市民病院の設計・監理を通じて、医療・生命・人間などについて深く考えさせられました。尽きるところ「人間もまた自然の一部」であり、「建築設計とは人間愛に他ならない」ということでしょうか。病院建築こそ真に[ヒューマンイズムの建築]であり、そこでは医療従事者と建築家の[真の人間性]が問われているのです。

かつて、建築は[芸術と技術の集大成]であり、その時代の全てを象徴していました。建築を見ればその文明の全容が掴めたのです。建築史を紐解いて見ますと、洋の東西を問わず近代までは[宗教建築]が、また産業革命以後は市民階級の台頭により、経済・産業最重視の[業務施設]が社会の中核施設でした。来る21世紀は[人権]の時代であり、[共生]の世紀といわれています。政治・経済・芸術・文化等の様々な領域で地球規模の交流を深め、内外の人たちが互いに助け合い「共に生きる」ためにも、病院などの[医療・福祉施設]こそ、その役割を担うことになるといえるでしょう。

[五感に優しい医療の実践]を目指す赤穂市民病院にとって、医療従事者と患者の潤滑油となりうる[ボランティア精神]は今後益々顕著となり、[癒しの環境]を高めるために大きく貢献することでしょう。真に地域に密着し、市民と一体となったボランティア参加型文化祭(市民病院祭)の具現化が切に望まれます。(まき・あきら 元日建設社員 本学総合研究棟・本部図書館棟設計担当)

図書館のマナーについて

林 倫 子

図書館とは静かな環境でおちついて読書や勉強ができる場所だと思う。静かな環境とは個人個人が集中して学習できるようマナーを守り他人に迷惑をかけないように心がける事により成り立つ空間だと思う。では、その図書館でのマナーとは何だろうか。

ある日、私はテスト勉強をするため図書館へ行った。しかし、目当てにしていた本がなくそれでも探し続けて辺りを見まわすと本を山積みにして寝ている人が居た。枕代わりにしている本を見ると、私が探し続けていた本が埋もれるようにして混じっていた。私はその人が枕代わりに使用しているためその本を見ることができず、またなぜか本が苦しうに見えとても不快に感じた。数日後、再度図書館を訪れた時、おちついた雰囲気の中集中して学習していると、大声で騒ぎながら入館してくる人が居た。その数人の言動で集中力がとぎれ、おちついた雰囲気も一気に壊されてしまった。たった数人の騒ぐという行為がとても目立ち沢山の人が気分や集中力を壊されてしまった。私もまぎれもないその内の一人であった。この他にも図書館で人に迷惑を無意識にかけてしまう行為はまだまだ沢山あると思う。沢山の人が不快な思いを感じないように一人一人が時と場所を認識し、周りの人に迷惑をかけないようにしっかりと心がけるべきだと思う。

これらの事から、私が考えるマナーとは、他の人に迷惑をかけないように、時と場所を考えその場の規則を守ることができる行為だと思う。

今後、図書館を利用する時は、図書館を利用する人達が気持ち良く時間を過ごせるよう前に述べたようなマナーを守り、自分の言動に責任を持ち、他の人に迷惑をかけないように、周囲に気を配ることを心がけ利用しようと思う。

(はやし・みちこ 第二看護学科1年)

本を読むことに対する思い

久保田 起 左

私は、子供の時代から本を読む事があまり好きではなく、せつかく母が私に、与えてくれた本も、全て読み終えたものは数冊でした。母に言わせれば、私には集中力、持続力がなかったからだと言っていました。その結果、今になっても、本を読む機会は少なく、又本を読んでも、とても時間がかかってしまいます。だからといって子供時代に、本を読まなかった事に対して、特に後悔などはしていませんでした。

しかし、1998年インドで開催された第26回IBBY世界大会での、美智子皇后さまの「子供の時代の読書の思い出」というタイトルの講演をテレビで聴き、大変感動しました。そして子供時代に本を読まなかった事に対してとても後悔しました。私が一番心に残ったところは、美智子皇后さまが自分にとっての子供時代の読書とは何だったのかというところで、「何よりもそれは私に楽しみを与えてくれました。(中略)それは、ある時には私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は私が外に、内に、橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれました。読書は私に、悲しみや喜びにつき、思い巡らす機会を与えてくれました。本の中にはさまざまな悲しみが描かれており、私が自分以外の人がどれほどに深くものを感じ、どれだけ多く傷ついているかを気づかされたのは本を読むことによってでした。」と話されたところです。

このことは今私が看護を目指す者として、一番根底になくなくてはならないことだと思います。人の悲しみを知ることで、私自身にも人間としての厚みを得ることとなり、他者への思いを深めること

になるはずです。今からでも遅くはないから、自分で経験することのできない悲しみ、苦しみ、喜びを、本を読むことから知り得ていき、他者の気持ちをもっと理解し共感できるよう、人間としての厚みを増していきたいと思っています。

(くばた・きさ 第二看護学科1年)

陸上と私

田村 洋輔

まず自己紹介からさせていただきますと、私、陸上部に所属しております、種目は、主に中距離、特に800 mを専門にやっております。



筆者 前から2人目

陸上部というと、皆さんからよく、『走るだけで一体何が楽しいんや?』とよくたずねられます。どちらかということ、やっていない人は、一步退いて接することの多いスポーツだと思います。確かに、走るだけです(笑)でも私個人の意見を言わせて頂くと、やっぱり『速くなること』、これが陸上の魅力だと思いますね。僕も入部したての頃は、ほんと遅かった…。高校の頃は帰宅部で何もしてませんでしたから、100 mを走らせても15秒台でした。こんなんで試合に勝てるのかなあ

と思ってましたが、今や100 mは専門外ですが、12秒台中盤を出せるまでになりましたし、専門の800 mや1500mでも関西の医科系の試合では上位に食い込めるまでになりました。

しかし、『速くなる』のは大変です。試合で勝とうと思うと、まず練習で培った実力がなければ話になりませんし、その日の体調も万全にしないといけません。またUPする時間が遅ければ、UPが不完全に終わり、どんなに絶好調でも、体調が万全でもいい結果を残すことはできません。

そうして、UPを終え、名前を呼ばれ、スタートラインに立つ時、ピストルが鳴るまでの静寂の数秒間の間に、ものすごい緊張感や、『スタート失敗したらどうしよう...』などという不安感に襲われます。この瞬間だけはほんとにいつも逃げ出したいくなります。僕は決して好きじゃありません。ランナーみんなそれは同じだと思います。その感情を、『絶対いい記録を出すんだ!』などの決意とか『あいつには絶対負けん!』などの闘争心、『練習であれだけいい記録が出てるんだから負けるはずが無い!』などの開き直りとかで覆い隠し、皆スタートするのです。

陸上は、短い時間の間に自分の実力を全て出し切らなければなりません。これが他のスポーツとの違いでしょうか。特に、800 mは、スタートを失敗するだけで先頭とすごい差がつきますし、そうかといって『スタートから飛ばすぞ』なんて思って力んでスタートし、力んだまま走り続けると、乳酸が一気に全身を満たしてトラック2周なんてとてももちません。(何度失敗してきたことか...)普通に走っても無酸素でほとんど全力に近いスピードで走るわけですから、乳酸はどんどん全身に溜まって、体はいうことを聞かなくなっていくます。力めばなおさらです。400 m全力に近いスピードで走っても、まだあと400 mを全力で走らないといけない…。最後のスパートなんてどんなにしんどいことか...

しかし、もし最高の走りができ、なおかつ自己ベストなどたたき出せた時、走り終わった後の達成感、心地良い疲れ、そしておいしいビール(?)というのは、日頃の厳しい練習を思い浮かべると、ほんとに言葉では言い表せないほどうれしいものです。これも陸上の醍醐味の一つですね。そして...『また俺は速くなった...。』

これがまた自分を、次の試合へと駆り立て、またこれがあるからキツイ練習にも耐えられるんだと

思います。

陸上を3年間続けてきて、多くのものを得てきました...多くの人々との交流、そしてまずは走力です。電車で遅れそうになっても、猛ダッシュして間に合うたびに感謝しますね(笑)。そして体力、持久力、忍耐力...でもやはり一番は精神力ですね。嫌なことから逃げずに立ち向かうことができるようになりましたし、最後まで物事を諦めないようになりました。スタートしてから最後まで終わるまで、どんなに不安でも、どんなに苦しくても、たとえ何人に抜かれても、途中で一瞬でも『もうだめだ...。やめよう...。』などと諦めたりしたらもう全てが終わるスポーツですから。また、僕はほとんど0からのスタートでしたので、『こんな俺でも、何でもやればできるもんだな。』...そんな自信みたいなものもつきました。これらは医者になっても必ず役に立つものだと思います。

これからも、さらに速くなるために、また新しい自分を見つけるために、僕は走り続けていきたいと思っています。まあ、最近、陸上部は部員が減少し、それが少々気がかりではありますが...(笑...ってる場合ではないですね。誰かこの部を救ってくださいーい!) (たむら・ようすけ 3回生)

図書館のHome Pageを利用しよう!

本学図書館のHome Pageは、平成8年5月に開設されて、今年の10月で4年5ヶ月になります。その間に色々内容について工夫をこらしてきました。

そこで、利用者の皆さんに最近の図書館のHome Pageの利用方法について、主な点を中心に説明致します。

1. 所在地

ここをクリックすると、本学図書館の所在地及び交通によるアクセス方法が可愛い絵図で見ることができます。

2. 利用案内

利用案内は日本語と英語の両方で説明しています。時々海外から文献複写の依頼や医学関係機関への留学希望の手紙が図書館のemailに飛び込んできます。

3. 施設紹介

ここをクリックすると、館内施設が写真入りで出てきます。写真を見ながら館内ツアーを楽しんでください。

4. 図書館からのお知らせ

開館時間の変更等のお知らせをup-to-dateに載せています。時々accessしてお知らせを読んでください。

5. OPAC(資料蔵書検索)

図書館の図書、雑誌の所蔵情報がいつでも、どこからでも(学外からでも)検索可能です。

6. オンラインデータベース

1) オンラインジャーナル

外国雑誌のonline journalが学内LANを經由して、研究室の端末からaccess出来ます。論文のfull textも入手可能です。

2) 医学中央雑誌のWeb版も研究室の端末からaccess可能です。

3) British LibraryのInside Web,PQD;medical library, ScienceDirect等のデータベースシステムの利用により、外国文献の書誌情報や雑誌情報が豊富に利用できます。

7. 図書館報 (OMNIBUS)

ここをクリックすると、年三回発行している図書館報の全文記事が読めます。

8. MEDLINE文献検索

学内のどこからでもMEDLINEのデータベースがいつでも検索可能です。

以上図書館のHome Pageのメニューを紹介しましたが、access方法は、医学情報処理センターのHome Pageから、またはURL <http://www.osaka-med.ac.jp/~tosho> からaccessしてください。

利用者の皆さん！大いに図書館のHome Pageをご利用ください。



他大学図書館訪問記 (11)

近畿大学医学部図書館の巻



図書館棟

近畿大学医学部図書館は同学医学部キャンパスのある大阪府南部・大阪狭山市の狭山ニュータウンの一角、緑濃い丘陵地帯のなかに、医学部及び付属病院とともにあります。近畿大学医学部が昭和49年（1974年）4月に設立されたのと同時に、医学部図書館も業務を開始されたそうです。

図書館棟は地上2階地下1階からなる独立棟で延べ2,424 m²の広さがあり、丘陵地帯に建てられているため地階も窓がある部分があり明るい印象をうけます。

図書館玄関は1階にありますが、ここには事務室への入り口と書店（厚生社）があり、利用者の図書館入館口は階段を上がった2階にあります。入り口を入ると左手にメインカウンターがあり、近くにMEDLINE CD-ROM版・医学中央雑誌CD-ROM版等の文献情報検索端末と、インターネット

トのWebページ等の閲覧用パソコンとがおいであります。この階には閲覧席が主に学生用として120席あり、書架には和図書が配架されています。

階段を1つ降りた1階部分はすべて固定型の書架となっており、古い雑誌が和洋別に配架されています。この書架には1階からは直接入れません。

さらに階段を降りた地階には、閲覧席が主に教員用として20席ほどあります。新着雑誌の書架があり、ほかに洋図書の書架や和洋雑誌ごとの比較的新しいものを収めた書架、2次資料の書架や一部密集移動式棚もあります。またこの階にAV設備として個人用が3席と、20人ほどが一度に利用できるものがあります。



館内2階

図書館の現在の蔵書冊数は、和書2万9千冊、洋書2万8千冊、製本和雑誌2万1千冊(1,101タイトル)、製本洋雑誌6万1千冊(1,626タイトル)あります。年間受入冊数は、図書資料和洋計514冊、和雑誌537タイトル、洋雑誌440タイトルです。

図書館を利用するためには入館券が必要で学生・大学院生・教職員および研究医等総員3,443名になるそうです。また、卒業生や他大学の方・医療機関の方には学外利用者の途があり、閲覧と複写が利用できます。

文献検索システムとしては、医学中央雑誌CD-ROM版をキャンパス内専用としてサービスしており、MEDLINE CO-ROMおよびCurret Contentsについては学内のネットワークを介して利用できるようになっています。電子ジャーナルシステムとしては、ProQuest Directシステムとエルゼビア社のScience Directが導入されています。またそれらの案内情報として学内専用のホームページがあり、利用案内・お知らせ・学外利用・文献検索・電子ジャーナル・現行受入雑誌目録洋と和・学部図書館リンク・外部情報リンクのコンテンツを提供されています。

同館の将来的構想としては、堺市および生駒市にある分院も含めた図書館業務の電算化が平成13年度以降に、そして資料増加のため手狭になった書架を電動密集移動式にすることによって対応することが平成14年以降の課題となっているようです。(宮本)

書評

- DNAのパイオニア - ジェームス・ワトソン

ジョイス・ボールドウィン著 寺門和夫訳 Newton Press 2000年
吉田秀司



ジェームス・ワトソン。物理出身の私は本学に来るまでこの名前を知らなかった。分野を転向し、分子生物学を勉強する間にDNAのらせん構造を解明した人であることが知ったが、1年ほど前までは故人であると思っていた。この本は、その現役研究者であり、すでに偉人と化している人物の伝記である。DNAの二重らせん構造解明の経緯はワトソン自身が著者である“二重らせん”で有名であるが、本著では二重らせん発見はもちろんのこと、ワトソンの性格、私生活、Cold Spring Harbor Laboratory再建を初めとするノーベル賞受賞後の彼の業績などを、本人や周辺の人々の話をもとに第三者が客観的に描いている。

従来の科学者の伝記では、「幼少時代の学校成績は凡庸だが、発想で非凡なところがあった」というパターンが多いように思うが、ワトソンは元々優秀だったようであ

る。飛び級で大学に進学し、同年代の友達ができない鼻持ちならない人物のように描かれている。そして研究者となつてからも、とにかくノーベル賞を狙えるような研究をしたいという野望に満ちていたようだ。要するに彼は研究テーマ選定の当初からノーベル賞を視野に入れており、その通りに賞を獲得したのである。彼がDNAのらせん構造を発表したのが25歳、ノーベル賞を受賞したのは34歳のときで今の私と同じ年だが、若くして今世紀最大級の発見をしたことはもとより、そもそも大学出たての若者がいきなりノーベル賞を狙うという発想をしたところに驚く。

本著ではDNAのらせん構造解明の経緯とその後の人間関係について触れている。ワトソンはフランクリンが解析したDNAのX線結晶データを盗んでノーベル賞を獲得したように言われているが、本人はそれを特に否定していない。「当時の人間関係ではしかたがなかった」と語っている。この辺りの話には賛否両論あるが、フランクリンを描いた「ロザリンド・フランクリンとDNA」も読んだ上で各自判断すべきであろう。ただ、彼は自分がノーベル賞を受賞するときまでフランクリンが生きていれば、フランクリンも共に受賞していただろうと思っている。

若くしてノーベル賞を受賞した彼はハーバードを始め幾つかの大学に招かれたが、後世の彼の所属を語るとき真っ先に出てくるのは“Cold Spring Harbor Laboratory”だろう。質の高い研究がもたらす知的な雰囲気満ち、歴史的建物と新しい建物が景観に溶け込んだ穏やかな魅力ある研究所...らしい。経営危機に陥った研究所の財政を立て直し、現在の景観や雰囲気を作り出したのは彼である。彼は資金調達から研究施設の配置や設計にまで関与している。研究者が研究しやすい環境とはどのようなものか？それは研究設備だけでなく、建物や敷地内の雰囲気も重要であると彼は考えている。その信念に基づいて築き上げられ、運営されているのがCold Spring Harbor Laboratoryである。ここでは毎年様々なシンポジウムやセミナーが開催されているので、私も機会があれば是非一度行ってみたいと思っている。

本著は伝記だが、この中のワトソンは偉人のように飾り立てられてはいない。しかしながら研究者としてのワトソンに対しては羨望を沸き起こさせる。それはノーベル賞の受賞や自分の思い描く研究環境の実現など、“研究者ならすべての人が心に抱く願望を実現した”ことに対してというより、“願望実現への執着心を持ちつづけた”ことに対しての羨望のように思う。夢の実現には何よりも自分を信じて行動する精神力がまず必要であると教えられた本だった。(当然才能と努力も必要でしょうけれども...)

(よしだ・ひでじ 物理学助手)

医学図書館員基礎研修会に参加して

植田 浩行

去る8月23日(水)に埼玉県立大学において、日本医学図書館協会主催の「第7回医学図書館員基礎研修会」が3日間の日程で開催された。これは「日本医学図書館協会教育大綱」に定められている教育プログラムの一環であり、医学図書館員として基本的に必要とされている知識や技術を体系的に学習するとともに、医学図書館全体に関わる認識と理解を深めることを目的に開催されたものである。「医学図書館での仕事にすぐ役立つ知識～初心者とベテランのリフレッシュのために～」というテーマで行われた今回の研修会のプログラムは次の通り。

(初日)主に図書業務に関する講義が行われた。

1. 講義「医学図書館と日本医学図書館協会」(医学図書館の定義と役割、その意義と今後の課題について)
2. 講義「図書の収集・受入、蔵書構築」(図書の収集受入や選書について、東邦大学のケースを例に挙げて)

3. 講義「書誌データを用いた分類・目録業務」(書誌の分類・目録業務の規定及びこれらの業務の意義)
4. 日常の図書業務に関する疑問点に対する回答(研修会受講者に対してあらかじめ図書の日常業務に関し質問事項を受け付けており、それに対する回答)
5. 講義「図書の補修」(ナカバヤシ株式会社兵庫工場関係者による、破損した書籍の修復実演)
6. 講演「基礎医学研究者から図書館に期待するもの」(埼玉県立大学林教授による講演で、医学者の立場から図書館に何を求めているのかといった内容)

(2日目)主に雑誌業務に関する講義が行われた。

1. 講義「雑誌業務の流れ」(鶴見大学図書館における雑誌業務を例に挙げて、雑誌業務全般について)
2. 講義「外国雑誌の価格問題」(洋雑誌の価格問題について、何故価格が上昇するのかそして価格上昇に対しどう対処すべきかといった内容)
3. 講義「電子雑誌とリンク」(電子雑誌の特徴や仕組み、問題点について)
4. 日常の雑誌業務に関する疑問点に対する質疑応答
5. 講義「医学図書館の常識用語」(医学図書館の業務に携わるに際して耳にする専門用語及びそれに関連するホームページなどの紹介)
6. 埼玉県立大学図書館の施設見学

(3日目)

1. 講義「文献検索」(文献検索の目的と、それを担当する者に求められる事項)
2. 講義「図書館で使えるおすすめWeb紹介」
3. 講義「相互貸借」(相互貸借業務の流れとそれに伴う著作権問題について)
4. 講演「自己研鑽の方法と専門性の磨き方」(図書館司書としてどうあるべきか、司書資格制度と任用制度について)

今回の研修会は初心者想定した内容になっており、小生のような図書館職員になりたての者にとって日頃の業務に抱いていた疑問点の解消にも役立ち、非常に意義あるものであった。

(うえた・ひろゆき 庶務係)



1. 二階閲覧室の外国雑誌の配架スペースがあと一年でいっぱい!

二階閲覧室に配架している外国雑誌の棚があと一年でいっぱいになります。そこで、図書館では、来年の夏にかけて、二階の外国雑誌をある年代で分けて地下一階に移動する計画をたて、準備作業を開始しています。利用者の皆様には今後ご迷惑をおかけすることがあるかも知れませんが、ご協力をお願いいたします。

2. 新規受入雑誌(看護専門学校図書室)

Nurse Education 1(2000)+

3. AV資料について

今年度より看護専門学校図書室でもAV資料を受け入れることになりました。

既に21本のビデオテープを用意しましたので、どうぞご利用下さい。

3階のAV室に配架しています。

図書館業務日誌

5月

- 18日(木) - 19日(金)
日本医学図書館協会総会(於、
秋田大学)
- 25日(木) 図書館合同運営委員会(於、図
書館会議室)
- 31日(水) 医学情報処理センター運営委員
会(於、第二会議室)

6月

- 3日(土) 看護専門学校同窓生見学来館
(三十名)
- 12日(月) 館報17号発行
- 13日(火) EBSCO社Clint Rumble氏(副社
長)来館
- 15日(木) 日本医学図書館協会理事会(於、
東大医学部)
- 22日(木) 図書館合同運営委員会(於、図
書館会議室)
IBM図書館システム研究会に館
員参加(於、IBM京都営業所)
- 23日(金) 北海道学園大学図書館の館員見
学来館(二名)
- 28日(水) 紀伊国屋書店K-Portシステムデ
モ(於、ニューメディア情報
室)

7月

- 3日(月) 関西電力学園専門部学生が図書
館体験学習(六名)
- 6日(木) 日本医学図書館協会企画・調査
委員会(於、図書館会議室)
- 14日(金) ユサコ(株)JSTORセミナーに館員
参加(於、千里ライフサイエン
スセンター)
- 21日(金) 日本医学図書館協会資料保存委
員会(於、図書館会議室)
- 24日(月) 紀伊国屋書店Silver Platter User
会に館員参加(於、梅田スカイ
ビル)

8月

- 4日(金) 紀伊国屋書店ジャーナルセミナ
ーに館員参加(於、梅田スカイ
ビル)
- 23日(水) - 25日(金)
第7回医学図書館基礎研修会に
館員参加(於、埼玉県立大学研
究研修センター)

編 集 後 記

今回のトップ記事は、森 秀磨教授に、またエッセイは上田助教授にお願いしました。

「二十一世紀の医療環境」のシリーズは7回目になります。今回は図書館のhome pageの利用方法を掲載しました。その他多くの方に執筆していただきました。表紙のカットは、北村達郎氏に描いていただきました。OMNIBUSへの読者からの投稿を歓迎いたします。(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書館報」

No.18号 2000年10月25日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社